和訓栞

伊之部

三

津田文庫
文庫 1
1604
3

倭訓栞前編三

伊の部　　洞津　谷川士清　纂

い　發語の詞に多く見ゆ尓雅にも伊維也注に發語辭とみえたり悉曇にても伊の字は根本の義なりと見ゆ神代紀乃哥に以和多羅素万葉集に伊縁立之射立為兼伊隠伊積なと此類挙て数ふへからず○人の名の頭にいふ詞にて呼出せるなりめし日本紀乃哥に毛野の若子い万葉集に家なる妹い續紀宣命に藤原朝臣麻呂等伊又百濟王敬福伊又國王伊の類多し○神代紀に氣といふとよめりいきの略なり○膽をいとよむも氣の義なるへし○靈異記に脯を訓せり肺脯とつけ肺を肝也と注せり漢貨殖傳に濁氏以胃脯而連騎注によるに羊の胃のなおく也胃脯とつゞけしより此訓あるや○射いるの略語ゆみ反いなり万葉集に弓をいとよみしことみえたり○鑄もいるの略なり万葉集に寝をいとよめりいぬるいも寝といへるをもいゝぬるいこそ寝らえ寝いの寝られ寝をなどいふ皆同し日本紀に長眠をながいとよめり○万葉集に馬聲をいとよめるハ義をもて訓せるなり○五の字

早稲田大学圖書館藏書
つた文庫
010190595795

△いか 五十の字をよむハ日を重る義なり五十も古語にいかといへる事多しといへり

△いい 唯字をよむも音の響にハあらず倭語の答辭なるべし曲禮に先生召無諾唯而起とも見え文選注に唯ハ謙應也といへり

△いうじ 猶子とかけり禮記に兄弟之子猶子といへるより西土にも姪の稱とせるを古し今ハもはら縉紳家の義子の稱となせり

△いえ

△いを 倭名鈔に魚の俗語也といへり伊勢物語にもいをとかけり又成なり○同書に脖をいをのふえとよみ魚丁をいをのかしらの骨とよめり

△いほさき 万葉集に防人(サキモリ)の歌に見ゆいハ發語小茶なり茶をさきとよむハ日本紀 なりともいへり一説に五百(イホ)箭(サ)の義乎ハ本の誤なりともいへり

△いか 五十日をよめるハ兒生まれて五十日に當る時に祝ふなりかひみて餅をいはひ 紀のいかなりといへり七〃の報をきかるなり玉笑零音に人之初生以七日為臘一臘而七魄成故七〃四十九日而七魄具矣と見えたり

今俗生兒をいふごとハいかも五十日兒の義なりまた菓を踊さる小兒の衆にふがこてし○烏賊をいかといふハ形をいかめしく骨をおとやかなる名つけるなるべし背上の甲骨ハ海螵蛸なり五島いかと稱せらるハ高麗し文腹中小墨汁ありて常によく噀て人の害を防ぐ文字ハ旗家に井中より五湧いかの子を出すと北海小魚し○衣架ハみぞかけといふ今ハ衣桁といふ衣桁ハ衣を曝する竿揚也よそ杜詩に翡翠鳴衣桁とも見えたり俗稱

さしかかりのいるにかるあたる事ハ後語にぬしとて人のかるるん

いが 古事記に罵詈(ノリテ)曰伊賀所作仕奉於大殿内者意禮先入とも見えたり中古の物に伊賀分などいへるもあへてなりいハあと書きて吾の意小や万葉集に汝を那賀といへるがし○伊賀の國號もいがの轉音にて猿田彦神の女吾(ア)娥津媛命に出られる風土記に見えて倭名鈔伊賀郡阿我とも見えたり○倭名抄に栗刺とあるハ射毛の義なるべし筑紫人ハいげともいへり毛毬とも見ゆ史本集り

よそり求む人を判てよいがくらの中なるカなるべし

苞の開くるをいふ也しといふ倭名鈔に鏄𨨞をよめり唐書に義甫笑中有刀とみえたり

いかゞ　如何又云何をよめりいかにいかんいかで等皆同語也又若爲を奈何も同し那ハ
如何奈何の合音也眞言之曰那長言之曰奈何とみえたり唐詩に無奈を無
那ともよめり是をいへり何那も同し詩詞にハ執與乃意に用ゐ奈何を奈河
とも通し用ゐるなり[illegible]ハ俗語なり

いかし　日本紀に嚴字重字祝詞式に茂字などをよめり忌惶根尊の活をいふなる
庵し梵子にも郁伽翻云威德とみえたり○関東にていかいといふ俗語も是なるへし

いかる　忿怒をいふ氣上(イキアガ)るの義なり素問に怒則氣上とみえたり神代紀に起
嚴顔をもよめり

いかむ　大猫なとの怒り嘷るをいへり法華經の嘊喍をよめり虚堂録にも千嘊
實(ヲ)とみえたり童蒙頌韻に信をよめりいかとつるなとも云り

いかき　万葉集倭名鈔等に𥯲籬をよめり神社にもいかきといへり忌籬の義なりといへり

いかし　源氏にいかしき波又たけくいかきなといふハ猛をよめりいかしに同し○俗に
大きなる事をいかいといふもいかしに同し

いかた　倭名鈔に鎔字をよめり漢書の注に鑄鉄形也と寺鑄形の義なり摸範を
譯せり童蒙頌韻に型をよめり

いかだ　倭名鈔に桴筏をよめり艀艭も同し烏賊手の義成へしたてもいかだも
いかだかの故にもいへり○いかだしハ筏さす人なり

いかり　倭名鈔に碇を訓せり万葉集にいかりおろしのおもかげにいへり古へハ和漢ともに石を
用ゐたる成へし鉄猫木猫などハ後世の事にやよて椗字を造れる事中山傳
信録にみえて三才圖會に北洋可施鉄猫南洋水深惟可下木碇とみえたり
天工開物にハ錨に作る○伊勢年中行事に鍬山伊賀利の神事あり神風抄に
荒祭宮鍬山伊賀利と見ゆ延喜式帳に伊加利比女命といふもみえたり鍬木ハ何取之

いかけ　いハ發語なるへし又射かけの義にや源氏物語に火をさしいかけ根葉紙にかき
れいかけさせたとみえたり○尊海東の國の紀にみえしいかけなどといひつけとみえ
所にいかけにきみえたりかけ湯又志涌れならすそそき注ぐるといへり○職人哥合時
繪師の歌にいかけ地といへり今俗いつかけといふも是なり或ハ沃懸地と書り凡て物をま
きかけたるをいふなりいかけ地の名の力ハ大理用之といへり○事家物語に鑄懸と書り釦

とよめり字書に金飾器口也と見えたりいかけ師あり宋小説に老學菴續筆記を
引て市井中有補治故銅鉄者謂之骨露とみえたり
いかそうり　争をよめりいかんとはいふそふ也を成へし○いかそうは真字伊勢物語小如
何是波と協りといふハ久しかくの略成へし
いかづち　雷をいふ神代紀に雷公ともみえ本古事海府に雄雷雌雷とみえてり厳祇
の義といへりつちハ山祇を山雷とかき野槌を野雷とも書るめり日本紀に使人等が
怨徹于上天之神震死足島とみえたり足嶋ハ遣唐使の傔人の名使人等を
讒せし罪也延喜八年に禁中にて霹靂神火ありて侍臣多く夭亡せし事ハ扶
桑略記に見ゆ是菅家貶死の罪悪之世號にて一説婆羅を葬に臨く
大雷して棺を太虚に引挙し是其子を害せし婆の事とも○大和の国にいかづち
村あり古への神岳之方ふ集にいかづちのをかとよみしも是なり○鄭玄説に天之怒とす
いかるが　舊事紀に嘒とよめり哮吼の意ありて喉声ぞいかるといふハ怒る声
なり似たり太平記に喧啮なる貞々事を声ハ鵤の鳴声にてとみえたり○日本紀に
斑鳩をよめるも鳴声にて名つけたるなるべし倭名抄に鵤をもよめり新撰字鏡

同し鵤も鳴をよく霊異記にハ鵤鵤二字をよめり字鏡に桑鳸一名蠟觜觜雀
といふ是なり觜大に黄色にて此鳥の羽黒色のとなりといへり下字
集に互甘しやといへり著聞集の奇なり
いかるか　互らないしたれもさてむかしの人何を鳴らん
鳴声むかしこたりと定ゆかり又互みて斑鳩が鳩といふ古語神代よりみえて
たり今互まつしきよう互たてことものといふ○和名抄に丹波国何鹿郡といふ郷
ごとよみなせるハ斑鳩を將して書るなり○伊勢物語の歌に伊賀留我神社式に
見ゆ鵤村にあり斑鳩驛ハ播州にあり○拾遺集物名にいかるかのまげといふ事
みえたり馬の毛色の名なりといへり
いかごし　今の氏姓に五十嵐と書り神名帳越後国蒲原郡に伊加良志神
社あり五十日帯日子（イカタラシ）五十日帯の將説之五十日足彦命の事蜜に紀にみえし
いかたらめ　源氏に見ゆ伊賀専の義なるに狐といふをいへり伊勢語に專女三
狐神といへるはふれるなるへし續日本紀に伊賀国献玄狐と見えて延喜式に玄
狐ハ神獸也と見えたりさて岷江入楚に伊勢伊賀の說に媒の事をたうめと

いふといへるハ専ハ老女の称也狐ハ人をたぶらかすものなれバいへるにや○彩孫
楽紀に射干坂伊賀専之男祭とみえたり

△いき　氣息をいふ神代紀にみゆ生の義也韓詩外傳に人得氣則生失氣則
死とみえたり○俗にいきのよいわるいといふも氣の義なり史記に意氣揚々
とみえたり意氣地をもいへり○いきをつけハ呴なり嘔と同し童蒙頌韻に噓
をいきともよむ老子に或ハ呴或吹とみえて注に呴ハ噓皆開口出氣
也とみゆ大嘗祭式に一撫一呴とみえ江次第に到祓清之處以人形令
呴給といへるも義なり呴作吻にかく

いきの　生を延る詞なるべくなり○鬱蒸の氣をいきれといふハ氣をもらさ
ぬものなるべし○霊異記に酡をいきりしとよみ酡熱とつくり

いきれを　今をいふ万葉集に氣之緒とみゆ緒ハ玉のをなといふなるべし

いきざし　源氏にいきざしけそひなどとみえたり神代紀に氣字遊仙窟に氣
調をよめり氣機の義なるべし

いきほひ　勢をよめり息延の義なるべし○神代紀に德をよめり齋部八箇祝

詞にも德ハ勢也とみえたり

いきぶき　源氏にみゆ觸穢をいふ氣觸の義なるべし氣觸の展轉小甲乙丙の
法なり延喜式にみゆ

いきみたま　二水記永正十四年七月の下に親王御方其外御所方御生見
玉の祝儀なりとみえたり生霊の義なるべし八日より十三日まで内吉日を撰
て行はせらる事とせり四季物語七月の下にも玉まつる事一とせにふたゝび
なるをおもふに先祖の祭りハ年の終りなりしもいやまさるひとつかなしうおもひ
なされるとみえたれハ今俗にいふ生霊會ハ是逆修なるべしといへども
父母に餉ひまゐらするをいきみたまといふといへり

いきすだま　遊仙窟に窮鬼をよめり和名抄に天生死者を窮鬼といふいきすだまと
もいふ源氏にハ魑魅の訓をいきすだまとし怨霊なるべし

いきどほり　憤をよめり論語に慍をよめり怒廻の義なり又さしを暗せしなり
日本紀に嫉妬を訓し孝にもよむ新撰字鏡に悁をいきどほろしとよみ日本
紀に亦よいきどほろしとみえたりいきどほろ反なり

△いく　生といふ氣と發語なり○幾をよむも氣息の數より出たる詞なるへし　いく
ついくらなとの數是なり○往をいくとよむ事万葉集に多く見えたり日本紀に
も往をゆいそとよめりいとゆと通ふ例老を日本紀におゆと通し名を今も云
にいひかけし類是也○可成事をいくといひ不可成ことをいかぬといふ俗語も
往不往の義成るへし

いくさ　軍をよめり伍ゝ相属するの制によりて訓も五くさの義なりといへり
○日本紀に射をいくさともよめり射合箭(イクハスサ)の義軍も此義にや○神武紀に前軍
後軍を男軍女軍と名乗り後世の追手搦手の称是なり○万葉集に軍士
をよめり按に戦ふ時をいくさと称し是を戦ふ時ハいはすとも戦をぬ時も
治ハものをいくさといふなりとみえたり神代紀に兵をよめり

いくは　日本紀に的をよめり射をいくふともよめれハ其義成へし筑後の生葉郡
も的邑とみえたり淡路の国名にも育波あり尾張の海部(アマ)郡に伊久波神社
あり式に見ゆ○伊勢三重郡に生桑村あり

いぐし　五十櫛なり舊事紀に見えたり万葉集にいぐしたてみわすゑまつると

よめり祓串也よて堀川百首荒和祓にもよめり

いくり　應神紀の御歌にみえたり粒にいふ義語なり八石をいふと云り万葉集
にも辛の崎なるいくりともよみて海(ワタ)の底奥津いくりともみえたり鈔に山陰辰の俗石
を謂て久利といふといへり一説にいくりは石也但し海の石ハ色の黒き故をもていふ
ともいへり○いさよひ日記に大井川なりいくりとうちせてなしまた見えて見えたり
河原いくりとくやいとあるらなりといふは今も云り此義なるへし○出羽の俗石

(イクタリ)幾人をいくたりといふ

いぐるみ　矰繳をいふ射くるめるなり或はいぐるまとも見えたり弋をもよめり
繳ゝありてあるなりかゞるをいふも

いくひたるひ　出雲国造神賀(ホキ)詞に生日の足日とみえたり生玉足玉 生嶋足
嶋生國足國なと云かく祝語也○出雲風土記に足日山見ゆ

△いけ　沼池をいふ魚をいけるより名つけたるへし○いけの鳥ハ和名鈔に伊勢度会
郡伊氣とみえたる所なり世記に其塩淡満溢浦名乎伊氣浦止號支其處尓祭
相殿御饗仕奉手淡海子(アハミコ)神止號氏社定給支とみえて式に粟皇子神社と出

より皇子の文字を假しよし神名秘書世記等の加筆に謬て道生貴と書
も非なるべしと云り二ハ松下村のうるとあり
いけを　池簀の義倭名鈔に籞をよめり韻會に池中編竹籬以養魚曰籞と
見ゆ源仲正集り
魚すむいけのもすみよくなるらかくらやのいけをゝにあふらぬて家
いけにへ　倭名鈔に犠牲をよめり生贄の義也本邦まてハ賀茂の鯉熊野の鯛
春日の鹿池殿嶋のうろくづの類信濃の諏訪肥後の阿蘇も同し三州小坂
井村の兔足(ウタリノ)社の祭にも雀十二羽を献る釋奠の三牲ハ大鹿小鹿豕を用る
ら海にもし延喜式に見えたり
いけるをはなつ川　放生をよめり天武紀より見えて唐に放生池あり八幡の放生
會ハ養老四年に始まると云り八月十五夜によめる是なり異國よりも来りし
附宮代宮にありて平けし路なり石清水社紀に天延二年敕石清水八月
十五日會准諸節會音樂官人率唐高麗舞人供奉彼會又宜左右馬寮献
十列御馬以奉幣帛使と見ゆ○放生川ハ雄徳山を廻るをいふ

△いこふ　新撰字鏡に憩をよめり息生の義なるへしさ杉反也休息も同し九
州の鄙俗よこふともいふ○霊異記に憇をいこふとよめりいこしハ辛も
いこじ　根こじに同し萬葉集り
こぞの春いこじて植し我宿の若木の梅ハ花さきにけり
此哥を拾遺集に入られて移らしてと書り
いこよゝ　日本紀に岐嶷をよめりいこやかも同し
△いさ　日本紀萬葉集に不知をよめり人ハいさ心もしらずいさら川いさら波
いさゝ水と續くる是なり此言と通へり否の義なりといへり多く清濁あれな
けしても云り今も上總の方言にハいなやといふとぞ○いさとハ小魚なり
せいごに似たり○霊異記に譯語をよめるハ訛なるに同し
いざ　日本紀に去來をよめり發語の詞に多くいへり古事記に伊奢合刀(サシタチ)と見え
いざやいざたまへいざなふハいざの義也そといふ事も通へり事を記す際人も
さそふなりよて卒字もよめり伊奘諾伊奘冊尊よりいでたり梵書に今也也
人相召多云去來とみえたり○陶淵明か歸去來辞をかへりなんいざとよめりと

此來字ハ助語也といへり○去も來も俗語に用るハ倭漢皆同じ助語なり

いざさ　神武紀に伊奘過伊奘過と書て過音倭と注せりいざやと同しよて万葉集に率和と書ていざやとよめり○式伊勢國多氣郡伊佐和神社あり今此射和の里なるべし

いさむ　勇をよみ新撰字鏡に詾もよめり率(イサ)なふと義通へり○諫諍をいさめるも勇也と注せり○前に伊狗山いさむる象なとつく俗も狗のいさむることあり文選に半漢をよめり○日本紀に制字万葉集に禁字をよめるも諫諍とさとかよへり前に多くよめり○俗に挿をいさむといふも勇より出たり

いさみ　日本紀に功字幹字なとをよめり勇の義なるべし○いさみの山ハ伊勢飯高郡にあり万葉集に出て去來見山に作る夫木集のいさめの山も同し○寐覺乃義なりといへり

東鑑にいさめの里ハ初秋の夜なかさを独わすれ名そ

いさを　日本紀に長字魁帥渠帥なとを訓せり勇男の義なるべし

いさな　万葉集に勇魚また鯨魚をよめり壹岐風土記に俗に鯨をいさなといふ

とみえたりいさなの義ハよろこびて海中の大魚なりて勇魚といふより鯨をもいふ稱なる成へしいさなとり海と属けよめる是も義なり一説に勇魚の鱐鰭とつけしなりともいへり

いさり　万葉集に漁廻と書てかくよめりいそかりの義そか又いさる同集にいさると用ゐもいへり漁火をいさりび漁舟をいさりぶねといふ是なり○いさりの磯ハ讃州にありといへり

いさご　砂をよみ新撰字鏡に磣をもよめり石小子(イサコ)の義なり神代紀に砂石とかけるも

いざなふ　誘をよみ又率をもよめり去來をもいざなふことかゝしたる詞なりよて延喜式に率川をいざかハとよめり新撰字鏡にハ攣まる佉をよめり勸於人也と注せり○率我いざなふとよむハ万葉集よりみえていざなふを今もいまもいへりむとよめるハいざなふなれハなこれとよみ播川百首にいざなみり今もまいえむとよめるハいざなふなるなり

いさかふ　闘又諍をよめり競逆(イサ)の義なるべし演義文に和人合戦といへる是なり

いさちる　日本紀に泣字をよめり古事記にいさちるともみえたりいさハ去來の義

又小兒哭泣の切なるはいさちるを押よけしまりて泣をいふなるへし

いさをし　日本紀に功勲をよめり幹字古語拾遺に忠誠なとをよめり勇ミ雄くしき義なるへし

いさゝか　日本紀に軽小聊等の字をよめり伊勢物語に簡略をよめりいさゝけ又いさゝさともいへりいは發語さゝやかなる義也素冠詩注に聊猶且也と見ゆ文聊不敢博大之辞と注せり又薄もよめり十分ならさる所を安するをいへり又苟をよむ苟且草卒なり

いさゝめ　萬葉集古今集等に見ゆ假初の義なりといへり是もいさゝかと通ずるなるへし卒尓也ともいへりいさゝめにも同し

いさらゐ　日本紀に水潦の字をよめり潦ちの義なるへし古語の奇に長門のいさら小川の塘の如きもしかそおもふ君かなる

いさぎよし　潔をよめり勇ミ清しの義なるへし蠲をよむも蠲除して後潔清なるをいふ

△いし　石をいふハ堅緒しハ下也といへり日本紀に下をしとよめり下津石根なといふは義也とそ○竹木魚介皆よく化して石となれりなか葉に松化石

宋書に柏化石稗史に竹化石あり○代醉編に陽泉在夫餘山北清流數十歩涵草木皆化為石精明堅緻其水所經之處物皆潰為石といひ一書にいろはやの國の一國に有一異泉不拘何物墜其内半月便生石皮周裹其物とみえ又歐邏巴の西國に一湖あり挿木于内入土一段化成鉄水中一段化成石出水面方為原木也ともみゆ○石となるものハ寶亀七年仁和元年及東鑑にみえたり大石の我ひて碎け散る事紀州長尾謙信の春日山の城内にありしかたりごとにみえたり○石を抱て淵に入といふ語ハ二程全書に譬抱石沈河とみえたり○譚氏化書に虎目光化石墜星化石松脂化伏苓とふれめつくさるゝ紀人を率川おもとに石の部分もなりそねへき事變石となりえたり○江州石山の石ハ陽紀石なり宜なるかな天下の奇巖といふや○雄畧の皇女に腹中有物如水々中有石といふもみゆ醫書にいふ石瘕なり○石を煮て粮とする法ありて石羹といふよし本草綱目にみえたり○神代紀に稚をいしこによめり口訣にいしは也といへりうひ反いとなれはうひと一ッ言なるへし○物語に倚子をもいへり○東国にすくれたるをいしといふといへり

新六帖 うちひさつ宮の上とおもへハいしはなつかしのこふしくの里

いしゆみ　石弓也いし弓の義なるべし○史記に器不苦窳といへるをゆがみいしきはいつくすかよめり鑄嶋の義なるや文選に齧良雜苦とある苦をもいしきとよめるもおなじこゝろなり

いしき　日本紀に石槨をよめり万葉集に石城とかけるも是也柩を入るべき人麻呂死する時の詠にも磐根まきてとよめるも是なり

いしく　日本紀に不能致果をいしきことなくとよめり左氏傳に致果為毅と見ゆいさをしきの略なるべし雲井春に関白太后いしく見え給ふ又宮腹右京大夫勝元いしくの人となしき膝をましえてすゝめるとみえて今昔物語に何につけてもいしかる物也とかけるとみえてそうりく也又かゝる事も也哉いしからきまゝよふいしからぬものをまふ事とも御肇字をよめるは物なるべし○今女児乃詞にうまきことをいふも義通へり太平記の狂奇にいしかりし詞は夢窓国師もまことにさよも亦義をかまへてよめる也羽にて悪しきをいしといふ

いしなご　石投の義なりといへり投なりいしなともみえて倭名抄に擲石と見ゆ西行家集にあり

石なごの代りの落くるほどとなるに見ゆる日ハかゝりやとする○金葉集にいしなとりの石合といふ事をせしなりと見えたり淡路寺の家知りいしなとり作歌あり○小兒の語に小石をいしなといふ伊勢に石名原あり奥羽に石名坂あり

いしずゑ　倭名鈔に礎をよめり聚石為步渡と注せり新撰字鏡に磴又砌をもよめり万葉集に石走とかけり石橋ともいひ渡瀬に石を並べをいふ也又石瀬ともいへり或は石をいしばしといふなりいしなみとも云り石浜と云も石並の義成也又いはゞしといふも是なり○石橋ハ相撲也之義の大庭京就と戯也又瓊之氏にいはれ平記に石橋和義あり

いしがみ　出雲風土記に石神と見ゆ延喜式に猿田彦神を謂て石神といふ仁明紀に陸奥國玉造温泉石神式常陸國鹿嶋郡大洗礒前社の事文徳実録に委く見えたり又能登國羽咋郡大穴持像石神社又伊勢國鈴鹿郡の石神社は石神社と今も云く大神といふ小社村の山にある高さ百丈餘の奇岩あり因幡國神社御子石の事ハ標注等に見へて尾張城東物部神社も一大石をもて

ことにす又播州石の宝殿あり又姫社の社石の事垂仁紀に見えし今昔集に
わたりとふ石神のつまなるさまに記されたるなり
搜神記に豫章の戴氏か女病を一小石に祈て復本の所祠を建て神として祭る中
載侯祠と名くともみえ真臘風土記にも其宮殿ハ一塊石を主として祭る中
國社壇中の石のかしこともいへり又中山傳信録に以石為神澆酒祈福ともみえたり
いしうら　万葉集に夕衢問石卜以而ともみえたり即石神と埃嚢鈔に出神
乃祠に名石を立て石の経営をなして吉凶を卜する事なりといふ今河州水
分といふ山村の天彼王神の祠に石占あり世に霊異と称せり○景行紀に石ま
蹶て占はせられしもまた石占といふへし○山槐記に朱雀院鎮守石神ハ称えて
いしぬやう　称唯二字のよみをかへりからいひなれたるにや御請の事なり世
俗濱深抄に称唯ハ乗伏而段称唯とみえたり
いしやう　以上ハ中世下文の流に以テ下スこと事しハ官長より令する文書なれハ
なり故ハ抱ハもんをかへんで上をとす此字筆せしよといへり
いしなぎ　倭名鈔に擶をよみ日本紀に抛をもよみ又抛石をはじきともよめる

見たり源義家奥州の役に石弓といふも見えたり平家物語太平記にも見えて
とり異朝の砲車なといふ物の類なるへしといへり四聲字苑に擶建大木置石其
上發機以投敵也とみえたり
いしおび　倭名鈔に紀伊石帯出雲石帯越石帯なとみえて又有文无文玉
馬脳犀角の品あり○頭文隠文といふあり隠文ハ今いふ毛彫なり頭文ハ花
の形なりといへり○鈔に又白玉帯波斯馬脳帯班犀帯鳥犀帯散豆帯なと
白詩に通天白犀帯ともいへり又其腰有純方丸鞆櫛上等之名なとみえたり
△いすゞ　五十鈴をよめり五十鈴之川ハ日本紀にみえて五十鈴の宮ハ古事記にみえたり
とり大小之金鈴五十口天上より投降したまふよし太田命御伝記にみえたり
○古事記に詔者此之鏡者専為我御魂而如拝吾前伊都岐奉次思金神
者取持前事為政此二柱神者拝祭佐久久斯侶伊須受能宮とみえたるを
鏡と思金の二柱なるへきを思金神の事後式帳五部書なとにもみえてさらにいはく
神語記神皇實録にみえ思兼命の相殿にます事をいへり
いすゞき　古事記に踏而立走いすゞきてとみえたりいはゆる騒ぎともいへど

より不覺也絶のきれけて夜之大殿祭祝詞にもみゆるあめど
夜女とよめるは字の如くにて富登多々良伊須々伎比賣の故事と同義なるべし
いそろぎ　祝詞式に伊須呂許比阿礼比坐といへるより荒ぶる神たちの競ひ
いさかふ義なるへし又すゝろ又そゝひ又ぎなれるといふぞ小同し一説にいは綾す
ろいするるの略とも又さ来く文方第某にまぐし競といふを童に江人
いさかひのすしひさとかもあさ男らかするにも争ふをひさひくけまんまさとより
△いせ　神武天皇の紀に五瀬命ましませり綏撫集にいせわたる川なとあり
そは瀬の義なり又五十瀬の義なりともいへり○伊勢の國の名義も同義にて江次
第に渡安濃川三瀬　夫木集に
鈴鹿山いせ路かゝる三瀬川のなにせきや人に渡るらんを
少くも見えたり五十鈴川瀬の多きより名をおへり書紀伊勢称徳には妹背と云へり
猿田彦鈿女命の故事によれるにや　古事記に伊勢綾を定めしよしみえたり
○伊勢や日向の物語といふ諺は猿田彦の故事にて神代紀にくはし○舊
事紀に武刺國造祖神伊勢津彦倭姫世記に出雲神子出雲健子命一名

伊勢津彦神一名櫛玉命とみえて伊勢の國は猿田彦神の志りらる所なるべしと
後に伊勢津彦春日戸の二神國を奪ひ終り神武東征の日に天日別命より
兵を發せしむ二神畏伏して國をさりて伊勢津彦は大風を起して信濃に去り
春日戸は河内國に去ると風土記石窟本縁等にみえたり○伊勢都彦は天日
別命之後也と姓氏録にみゆ天底立尊孫也
いせ縫　縫ものするにいふ詞なり兩方を縫合するに一方のちゞむ事をいふその心
して一方は緊く一方は徐かにあるをいへり紙葉紙に伊勢物語の名を號するは
伊勢は僻といふ義なるといひ堀河院百首より伊勢ならぬひが事そとも
思ひましとみえて法師鴨長明か伊勢人はひが事志たりとよめるも皆
なるにや挾草紙にはいやしく伊勢の物語なるにやとみえたりといふを證むべし
伊勢人のひがことはいひつらくて我が見付るもつくしみなかゝらぬめぐりなどせらる
今昔物語にみえてより又齋宮業平より世に傳へて惟喬を主君とて伊勢人といひ
僻事志たる世話も出来たるものとみえり但し伊勢物語は誤の名にや伊勢か事
かける文といふは我國より業平の自記にはあらず○海に浮けたはしく立

かむかぜといへりされバ伊勢ハ重浪よする國なるをもて名を得たるにや いせ
るゝよするを音通す偏字をよめり

いせしは　顕昭說に伊勢渚とて伊勢と志摩とひとつ國なりといへり
志摩ハもと伊勢の國を割しものなれバ志摩の國ぶりも　古今
集にいせしほとそへたり

いせをのあま　伊勢の延音にや助語なるべし　夫木集に伊勢をのあまとよめり

○夫木集に伊勢を瀆とよみしハ石列那賀郡長濱村の澳なりけり今は
せ鳥といふ

△いそ　磯字をよめりいし也渚なりとぞ磯をしともよみ石をいそともよ
み神名式にも石をよめり字書に磯ハ水中積也とみえたり或ハ礒をよ
めり字書に礒ハ石貌とみえたり此邦にて礒と一に用来れり新撰字
鏡に濶又瀆をよめり○倭姫世紀に玉𢬵伊蘇宮とみえたるハ礒の枕詞
よいつなりまたやひろ貝やなどよめるハ此意なり○前によそるといそ田いそ
菜いそ寝いそ枕いそ貝などよめりいそ菜いろ貝など一種の名とす

るに婦人好事のことなりいそ枕と稱するものハ和布の類なり○琵琶にいそ
といふ名所あり文冠かもあり

いそふ　日本紀に争文選に競をよめりいとゝといふと同じ万葉集に
いそはくといふもいくさふなれバ争のこゝろなるべし○丹波の風土記に石生をよめり

いそぐ　急字をよめりいそハ發語也くハ義さ日本紀の訓にいそけといへるハ及也
暫をして急のこゝろあり霊異記に颷をよめり○いそがハまつりといふ話ハ古事に
ものにふれ失なせれまくらなくともいそがずまつれせらるもあし

いそし　日本紀に勤字新撰字鏡に伪字をよめり續日本紀にいそしみ
ともみえたりいさをしきこゝろにやさて今もいそくすともいへり天平楯原
東人に賜ひし律藴志臣の姓も同義なり○五十師原ハ伊勢之万葉集に
山邊の御井ハいそしの御井ともみえて鎮坐本記に山邊行宮今
号一志郡新家村是也とみゆ今新家村の社を天王と稱す古き宮外に
三相殿の跡ありて社の西南にも社あり當時ハ白田とよべりと又鈴鹿郡
山邊村に古井存せり是式に所謂大井神社にして今河曲郡に属せ神風

拾遺にも鈴鹿郡山部御厨河曲郡山邊御厨とあり又本集にいそしの濱なと
よめるも見えたり古今六帖にもてさはぎて禁裏より每春試筆の硯をとらふ
るをこびたりとぞ得しと古語に千とせとよみていそとは五十ず師は鈴の誤りて
長谷にも山邊の五十鈴の宮なるべしとも見ゆ攝列依羅の社に祭る五十師
命も師は鈴の誤にて五十猛命なるべしといへり
いさゐ　倭名抄信濃國の内郡の名に竿井をよめり今の姓に或は竿井に
作りぬれもぬの誤せるにや若光寺のいさゐも也と緣起にみえたり
いそぢ　五十年とよめり又礒路の義あり○正数をいふには五十といそとよめ
る五十九王をいそはしらのみこともよびこしといへり
いそふり　古語拾遺の奇によりて相摸風土記に鎌倉郡見越崎毎有速浪崩
石國人名号伊曾布利所謂振石也とみえたり
いそがし　閑をよめりかし反ぎくにて出雲伊勢物語に急字をよめり嚴
急乃意なり仁明天皇實算の賀歌に世中のいそがし錯とみえたり武
備志に無工夫の三字を譯せり正譯はひまなり工夫は反語にひまある事なり

閑り童蒙頌韻に忽をいそがはしとよむも同じ或は忙ともよめり
いそのみや　續後撰集によめり日本紀に礒宮とみえて伊勢の齋宮なるよし
神名秘書に卽宇治の機殿なりといへり倭姫世記に從飯野高宮遷幸伊蘇
宮とあるは和名抄に度會郡の内に伊蘇といふ見なりといへと神名式に伊蘇
上神社とみえし多氣郡ともと神名秘書裡書に伊蘇は今逢鹿村字は古々なり
といふ見なりとみゆるなどに見えし
いそのかみ　神代紀に石上をよめり又いそのかみとも布留神社ましますよ
て石上振之神椙をとみえたり經世ふるの枕詞ともよりて零とも多にかくと万葉
集にもあまり律の思ひなふるはふるきの枕也といへり○宣賢の説にいへは綠
語昔時舊の義なりといへり歌によみ見るふるあく(?)の義なり
△いた　板をよめりいはは縫合たは手の手なるといふ構板普板なり
いたる　至臻戾到造詣適迄吊格届等をよめり往足の義にや臻は聚也戾は
止也到は到底造は進也迄は及也吊は精至也格は窮至又假をよめり音格
とみえ靈異記に達をよめり又詩の注に之を至也とみゆ

いたす　致字をよめり至らしめの略なるへし使至の義なり○俗語にいふハ為字の意なり

いだく　懐抱をいふハ綴語にて身にだくともいへり日本紀にハむだくとも

うだくともよめり衍説古語にいだかへて又俗にだかへるともいへる又むかふ及く

みしてだくと同し○霊異記にハ抱をゐだくと書り

いたむ　疼痛をいふ息をたむるの義なるへし神代紀に傷又哀傷又悽然なとをよみ

霊異記に軫をよみ新撰字鏡に快又悒をよめり○奇にいたくといふハ痛切

の意にて又あなかちの意もあり漢食貨志に痛を甚と訓をよて万葉集に甚

字又極大なとをよめり西土にも痛快痛飲なとみえたり○諺にいたいへの針と

いふも万葉集にいへる瘡(キス)にハから塩をそそくかことくといへるなり

いたり　職人奇合に流を濯頂としてたちうちの名をいへり今もみやこにハかく

海のなり○流を濯頂と産婦のあるに衣を竿に立にハ産所の穢物を

江河に流をるとて水邊を汚せりとて水邊を繁る事あるを謬きるなるへし

追薦と私記るハ非なるへしと白河燕談にみえたり

いたづき　ゆまいたつきといふ事のいたつき也 姫労の義也痛労の訓也

志らて日本紀に労瘁の文字を用ゐ文處にいたつきとよめり○倭名抄に

平題箭をいたつきとよめり板着の義也頭如し今の鐙射箭也といへり

古今集にも二義をかけてよめるなり

咲もりたりひつくみのありれなき身にいたつきのいるもしらすて

いたはり　労をいふ人の労を労とし病をもいたはりといふ　謡

なるへし字名録物語に勤をよめり○病の事をいたはりといふも病労の

意なり所労といふハ東鑑にみえたり

いたはし　續日本紀の宣命に勞弥と書ていたはしみとよめり万葉集に

もいたはしとよめり

いたはり　日本紀に功字績字をよめり上文の義にかよへり

いたづら　徒字をよめり痛くつらしの義なるへし日本紀に閑曠万葉集に無用

をよめり古言なり

人をかくはかる身のいたつらにいたつらになす事かなる

○身のいたづらになるといふも身の死ぬる事をいへりおもしくみえたり○いたづら

をのを西土にいふ光棍なと云り

いたゞき　新撰字鏡に顛頂をよめり至高の義なるべし○巓をよむも山頂ことを須なり倭名鈔にも同字鏡に岌峩もよめり○天武紀に蓋をもよめり

いたがひ　櫪をよめり板飼の義なり儀式帳に板立御馬とも見えたり光驥伏櫪志在千里なといふ是なり倭名鈔には櫪を志きいたとよめり櫪飼繫飼放飼など此外あまり文勞飼といふ事東鑑に見ゆ兵範記に櫪御馬勞飼館とも見えたりこゝは同じ義なるへし

いたやぐし　日本紀に流矢をよめり古事記に痛矢串と書り西土に痛棒といふが如し

いたづがはし　煩をよめりいたはし又いたはしくをいたづきに同し

いたゞきもちひ　紫式部日記栄花物語などに見えたり東山殿御記に正月戴餅及五歳まで行はるゝことといへり　年中行事に安藝高基朝臣嬰兒之時正月戴餅之間少納言入道祝言云學者祖父文章者如父と見ゆ附記に民間九日以片糕搭小児頭上乳母祝云百事皆宜とあるに同じ誑餅に小豆の煮

ふるをかし置るをいひてこゝと称を

△いち　市をいふ五十路の義なるべし万葉集に八十衢といへるにてしるし又いちくらともいふ商の義ともいへり市満ともいふ也○座頭の名に都字をよめるも義同し○神前に神楽をする女をいちといふはいつきの義にやいつきめ也伊勢に斎宮賀茂に斎院春日に斎女といへるも古語に見えたり守護家には古へ女祢宜といへるものあるといへり貞観官符に祢宜祝並置社者以女為祢宜と見えたりまた女祝とも見えたりさればその遺風なるべし○一の谷は摂津の名なり城は平宗盛の築く所廣袤三里寿永三年に城陥と見ゆ

いちぐら　倭名鈔に肆を訓せり市倉の義也店も廛も同し

いちしるし　日本紀に嚴忌をよめり源氏物語にいちしるし世又后の御心いちはやくていふひ大和物語に平仲がかずたりし女を妻の許にゐてまて來りたりし事いちはやくいひたれば遂にくたえよりでといへる是なり○喜撰式に若詠民時いちはやしと云しも見えしかは民犹神也といへるの義なるべし○詩に捷々をいちはやしとよめり伊勢物語にいちはやきみやびをなんしけるといへる是なり

峻嶒してさと紀弟に用ゐたり

いちはやび　祝詞式に御心一速比給ひしとしていへりいちハ厳の義一の字ハ假借之倭姫世記にいちはやぶるといへりちはやぶるも見ゆ及びなれど

いちはやぶると同し

いちのひと　令義解に一人に師範たるといふ天子を一人とするなり○一の人といふハ第一の人なり攝關をいふ一座の宣旨を蒙りし事なり天慶四年十一月左大臣藤忠平に賜ひし上宣となんさりされハ一の上といへハ左大臣の称なり

いちのみや　寛喜元年に諸國の一の宮を定められし又一宮記の説なり○伊勢の一の宮ハ一宮記に猿田彦大神とし河曲郡都波岐神社と見えたり諸書皆しかり神鳳抄にハ三重郡に椿御園見ゆされど今鈴鹿郡椿大神社とす山本村にましませり所祭猿田彦神相殿瓊々杵尊栲幡千々姫命也同所に椿大明神の社あり此家に由緒ありといふ○二宮の称も一の宮に准ずべし○氏姓にも一の家二の家ともいへり

いちじろし　著字をよめり最白きの義なり万葉集にいち白くと見ゆ顯然

定なり又揭焉とよめり炳焉も同し

△いつ　万葉集に何時とよみ萬葉集に幾時とよめり何時といへるも同し古今集にいつハとハ時ハわかねどといへるもあるハそをとへるものなり○いつともおもひぬといふ俗語なり後拾遺集なり

わきもひとる人もましけり世の中といつともなくもすくもなかるらむ

いづ　出をよめり俗にいでるともいふいづるの轉なり又語ハ今出の義だす及づなり○萬葉集にいつらともいへるも及ぶなるへし○神代紀に稜威をよみ皇代紀に嚴をよめり氣出の義なるへし一説に稜威此云伊都と見え古事記にも稜威にハ伊都とかきて伊豆とかゝず嚴ハ神武紀に此云怡途とみえて古事記にも伊豆とかきて伊都とかゝず都ハ清音にみ途ハ濁音によみて健き事といふ稜威の伊都と清き事といふ嚴の伊豆とハ別言なりといへり祝詞にハ伊都も伊豆もひとつに書けり○伊豆の國も相模駿河の海南に出たる地なるをもて名くべし○伊豆權現ハ天忍穗耳尊栲幡千々姫命を祭るといふ加茂郡に鎮まします社の右の方あがりの森に續後撰

集に伊豆の御山ともよめり○鎌倉の代に伊豆箱根の神社を並へさるゝて是を二所権現といひ祭紀にハをとよめり哉らん一説にハ箱根の神ハ天忍穂耳尊なるを伊豆ハ彦火瓊々杵尊なる走湯権現ともいふを脩ふ

いつゝ　早晩をいふなり續紀宣命にいふいつしかも同し万葉集に何時とよみて後と訓していふ辞なり又未をむかへていふあり数語にいつれる中ともいふに同し

いづも　日本紀に稜威をみいづとよめり何時孰も同し又孰與二ハ字をいづれとよめり孰若も同し菅家萬葉にハ焉もよめり

いつて　五ちよみなり忌生の義といへり忌ハ古語にして古の数ハ五つにて十数の中をわけて半に此をつくといへり又十ハ数五につゝまれしてまつにつゝかへ終くナをつとへてなるなり

いつく　齋といふ忌をいふの義なるへし万葉集に經若(エ)をいつく祝(ハフリ)春日りいつく三諸とよめり古事記に以(モテ)伊都久の辞多し○安藝の嚴島も古記に齋島とも見ゆ神代紀に宗文所宗文崇秘をいつきかしつくとよめり

いづべ　日本紀に嚴瓮をよめりいづハ湯津といふに同し武にいふ高倍神も亦

是なり釈に土瓶也といひ瓮も瓶もみな祠を敬する義なるし○万葉集に何時邊をよめるハいづくに同し

いつき　日本紀の前にみゆ私記に歳也といへり五十槻の義にや○嚴の一種木ともいへり穴ひらく竹の白きを摂ハ紀に齋等○齋宮をもいへりやを略しなる也り齋宮村ハ多気郡の故跡存せり齋村ハ飯野郡にありて倭姫命の旧跡事を修ふ○齋女をいふ齋ともかりを称せし清和実録に以藤原須恵子爲春日及大原野神齋とみゆ

いづゝ　泉をいふ出水の義なり○和泉の国も清泉国府にありてこれを名とすといへり和泉とかけるも国郡の名をはる二字を用ゐさせられしよりなるなり○いづミ川も今の木津川なり

いづさ　倭名抄に弓字をよめり射釣の義なるへし鞘鞦も同し嚢抄によりてよろしからなり

いづな　飯綱と書り稲荷の社にハ飯縄(イナ)と書かみつかさとまへ侍るとかり一説に奥州仙台飯縄(イヅナ)山に祀るとて飯縄(イツナ)三郎と呼るといへり信州戸隠

嚴緘に日永嶽武州高尾山なとに祀れり陀吉尼天の邪法なりといへり室町
秋葉山三尺坊の祠も百年以前戸隠より祀るといへりいづなの法は二十法の
一なりといへり宋史にも狐王廟と見えたり俗にいづなつかひといふは著聞集に知足
院殿の御祈の事によりて大権現といふ効験の僧のいづなの法を行はせられ
あるよし家中に狐の出たるを修し又如吉侍者外法成就なと年記にいへり
康富記に室町殿醫師高天被禁獄父子三人也此者仕狐之沙汰風聞と
見えたり谷響集に荼吉尼有二謂實類與漫荼羅衆實類荼吉尼名噉食
人心雖業通自在祭者得福名為邪法漫荼羅中荼吉尼者如来應迹故噉
盡心垢住大涅槃所以名乗如天龍八部皆此義也とみえたり文徳實録に
席田郡有妖巫其霊轉行噉心一種滋蔓民被毒害と見えしも荼吉尼の邪術成べし
いづも　國名也出雲はいづくもをつくる約なり素盞嗚尊の出雲八重垣
の神詠より起れりその事出雲風土記にみえたり○萬葉集に河と見えいつも
なりとよみしは藻なるべし宗祇の説にも玉藻鎮石とみゆ
いつはり　虚偽をよめり何時晴の義暗昧のさまなるを虚しく陽を詳にせず

同義なり古今集に
よそながらあやなく我はなかなかになれり
又いつはとはいつともなくいふをよりいつより外にまげるさまをいふなり○
新撰字鏡に諷も讀も譚もよみ謳をいつはりつくろふよみ佯をいつはり
こしらへとよめり○出雲をいつもといふ
いつはた　何時将の義なるを五幡山にかけるよりかへる山と和し
延喜式に越前敦賀郡加比留神社五幡神社と見えたり新古今集に
忘れなん世にも越路のかへる山いつはた人にあはんとすらん
いつきめ　春日に祀り齋女をいふ三代實録に常陸國鹿嶋大神の斎宮のみ
いつゝを　五緒の義車にいへり源氏物語に見えて必ずしも人にあらずといへり今音と
もて五緒車ともいへり
いづるいき　出入をいふいは氣を出いづる義なり入ならびいづる息の音を彫りあり
舌音の外に出ると同じくとかてる義なるべし○上京を出京といふは通せず
入海ならし一万葉集に入唐と書し延喜式に入渤海使入新羅使なと見えたるを

こゝも厳なる意也　遣唐ハいつしとよめり
いづらんぞ　烏悪安烏寧奚柰胡なとをよめりいづとかぞの義なりいつらんかとも
同し小爾雅ニ悪乎ハ於何也と見えたり悪ハ平声烏と通用す
いつしき　大殿祭祝詞ニ伊豆都志伎事无久と見ゆ伊ハ発語つましき純なる
なるへし万葉集ニつゝあくといふかしきりや
いつくしむ　仁をよめり痛く惜むの義なるへし人の全徳ハ仁也此のまなひ万
葉集ニ嚴をいつくしとよめるも意を同せり○霊異記ニ儼然をいつくし
ひとよめり万葉集ニ宮柱ハいつくしきなと見えたり
いつきのみや　斎宮なり倭姫命より始まりそれをとハ内宮のおもきなりしと
景行天皇の御代ニ多気宮を作りて五百野皇女まし後せりともいふ七十又
代のる斎宮立たまへり後多称院の皇女ニ粛子内親王の後ハ断絶をそ中
り後令小半之女宮子ハ皇女ニ非すして内親王称し宣下ありし先規録ニ見えたりと正史ニ八
世半あり今其旧址を斎宮村といふ所の者とよめるも今に現存せり○初め斎宮居ましまる
年二年其三年ニ當る九月上旬ニ二日をトひて伊勢斎宮ニ入奉るなり十六

日なせるの神嘗祭の日始て遣奉したまふより祝詞式ニ斎内親王奉入
時進神嘗幣詞と見えたり○聖武紀ニ立神楮於斎宮二門とみえたるハ大嘗
祭なきとハゆき殿を始めを指ていへり○賀茂の斎院も古にハいつきのみやと
よめりし六百番歌合の判ニ見えたり嵯峨天皇弘仁元年置斎院司以皇
女有知内親王為斎王と見えたり和名抄ニ紀野ノ辞我ニ斎院司いつきのゐのつか
さとよめりこれも古への斎院の事ニ三十四世の斎院禮子内親王の後断絶す後ハ大
内の初斎院ニて三年潔斎しま年の四月ニ社ニ参りたまへんとて御禊あり
て紫野の斎院ニ入たまふて中酉日祭ニ従ひたまふなり
いつきわらハ　斎童之給宿衣をべての神事ニ随ふる者の名目之男子之とあり
いつきむすめ　源氏ニ見ゆ万葉集ニきぬおやの中ニ後く斎なる女をいふ子と
よめるに同しといへり
いつかさね　五重と書り倶ニ綾ニて表ハ平絹の紅之女官餝抄ニ五重織なく
さかくハ七も八も十も時ニよりてかさねなら又は公卿の人ハ多かりけれハ心よく
ならぬゆへ五つといひ俗ニいふ十二單是也五衣（イツキヌ）ともみえたりみつかさね（略）

多かるもあり又ひとつくとりてうるもあるなり○七つぎぬといふも見えたり

いつもじ　五つ文字の義なり上西門院の命婦あまたありぬるをいふとぞ

弁局

人のいつもじの跡さらにてにもかけずかきくらしけりぬに

とよみ侍る歌法の日記にあり弁局ハ法師の女なり周禮の注疏に婦人

脩五德以此為貞婦とあり五ハ清貞美譜胎の婦德をいふと見ゆ世に女子を

みいつ文字と称するも此義なるべし後宮名目にみえたり

いつとものみち　五經をいふ日本紀竟宴歌に得段楊爾

いつとものみちふむ人ハたまやうにまどもしるこそえらばれりける

とよめり句ハ五經博士段楊爾をよみて此句ハよみ人の姓名をたち入たり

惟宗朝臣具範なり

いつくさのたなつもの　神代紀に五穀とよめり五種の穀の義なり○

五穀を稲粟稗麥豆と定めたまひしハ天照大神の制なり漢土ハ周令

素問周禮注谷梁傳注楚辞注孟子注など名異なりて一定せざれども稗ハ收

入とし孟子にも五穀と種といふすとあり古事記にハ稲粟小豆麥大豆と見ゆ

△いて　延喜式に射手とかけり西土そ弓手といへる是なり

いで　日本紀に歷乞字万葉集に乞字欲得字などをよめり物をこふことば

枕草紙にもいでなどゝ云々とみえたり

いでや　發語の詞にいへり日本紀に咄哉字万葉集に先字をよめり古今

集にいでや人ハことのみぞよき又いで我を人なとがめそなどよめるも同じ

いでは　和名抄に見ゆ出羽国なり今でハと呼り神名式に田川郡に伊氐波

神社あり姓氏録に出庭臣あり古へ名高き文蘇羽と出せり、よりて名なるにや

神社ハ今所謂金峯山にして出羽の池なり

いでます　日本紀に遊行をよみ又所幸文幸を訓せり行幸なり万葉集に御

駕とも見り出坐の義なり○継をよめるも就て居なりといへり集の義なり

たゞ交ちあると二四通してゝあるいちをでなどよめることし○神代紀なり

何來之晩也をなんぞおそくいでましつるとよめり今も人の来るをおそ

なくいふも古語と聞ゆ

いそれしさま

遊魂ハ和名抄にあくかれ出ともよめり伊勢物語に
思ひあまり出にし魂のあるならん夜深く見えハ魂結ひせよ
魂結ひといふ事ハ吉備公の作といふ秘術を陰陽家に伝ふとぞ
玉ハみつの主と三返誦して下かへのつまを結ふといへり委蒼叢談に譚本語
而為消語者無言默坐日出神墨荘漫録に范文正公長子監簿純祐自幼
警敏明悟過人文正公所料事必先知之善能出神公在西邉凡虜情機事
皆預遥知蓋出神至虜廷故公每制勝料敵如神者監簿之力也一日因出
神為人所驚自此神觀不足未幾而亡とみえたり文たの神さふへのやうにみゆ

△いと

辞にいふハ日本紀に最字万葉集に甚字痛字なとをよめりいとく
といふに同し○糸ハ五の義なるへしともいふ通を説文に一蚕所吐為
忽糸五忽也とみえり○犬頭の糸といふ故事今昔物語に見えて文治中参河
国より献ずるし神風抄に庭桜国に採代糸といふも見え赤兜糸となる
○今綠児ハいとけなきといふハ稚字の義古き詞なり紫式部日記にいとをかし
ひめ君とみえたり○いとき湯も旅行抄にいと川ハ伊賀名張郡にあり

源雅通

年経れはいろこく秋の山かけやおちくる水にそむるいと川の名

いとゞ

万葉集に彌字をよめりといへり是ハいやといふなるへしいとゞの語万葉
集にハなしいとゞハいとくの略なるへし伊勢物語にいとゞ去くもおもひける○文
選に専もよめり○俗に蟋蟀をいとゞといへり○望衰記に伊賀の事を記し
て長田のさとなそれとも手水をまゐりていとゞの大明神の御乳とまかて射
手とあていとゞとやすとみえたりお並へる里にて若の名所なり

いとふ

厭字をよめりいとむの略なる詞なるへし○俗に労をいとふ骨をいとふ
なといふハいたはるの意成へしちる花をいとふと詠をみえと云ふ古今集
りいとも厭ふくも昔らん最晴より厭字の義に従へたり

いとま

暇字をよめり出る間の義なるへし私に出る意を休暇なり今義解に
依私事而罷退為假とみえたり假も暇に通へり○服忌令に暇といふは俗に
いふ荒忌なり所謂父母ハ服一年暇五十日の類なり伊勢物語に逺闕日をいとま
乞ひと訓ぜる見えたり○俗に婦をさるをいとまとも云ふ休暇の義也暇の

はなちて樂善録に離出と云ひ離別と除するはまことなるべし

いとこ　從父兄弟をいふ出子の義をひき出といふは左傳に見えたり又字書に
まろめきむつびより云る詞なるべし倭名抄に再從兄弟をまたいとこ三從
兄弟をまたまたいとことよめり○日本紀の訓にいとこ從人はら從人どちやはとこ八
をいとこどちとよめり是八同姓をいふにや從父兄弟と注せり西土の書
にも相伯仲をいとこといふ○古事記の訓にいとこはいとしくおもふなり
さるは萬葉集にいとこなせ我君と見ゆわが親辞也

いとほし　勞はしく思す俗に略していとしともいへり僧形は竒に
年ふれたげしきみそり房ぶるくぬまさふほしげなけなれの方や
續紀宣命にいとほしみともみえたり○日本紀に哀不忍聽をいとほしが
るとよめりいとほしくはいたはしく思ふ也こと名伊勢物語に哀惜と書る
も誤れり○金術兵制に心肝をいとしと譯せり

いとふむし　新撰字鏡に鸎字をいとふむしとよめり痛背は我なるべし
日本紀に乾くともよめり

いとゆふ　糸遊の義ましてけよりいとゆふとびかへるぬまさふかさん此よく
こんへたり○遊絲といふ書紀に遊絲を字といふ糸は地なくちらくと
見ゆるものを云ふ文はそのむかしよりのもの野馬と同し

いとたけ　糸竹なり管絃をいへり絲竹管絃といふ重複也といふも陸賈
新語より見えたり○管弦は鳴ものあるび手に携へて口に唱へ耳に聴く
是を悉といふし　村上御記に見えたり

いとけなし　幼稚をいふいとけなしとも云り今もいふいけそれなしの助の
詞なり又无言解に此義物海によひとつわねとをさすしと同し義なるべし

△いな　否をよめり然の反に古字八不にて俗語にいなやといへり神代紀に不
須也とよみ万葉集に不言不聽不欲なとをよみ伊勢物語に不
知をよめるなども義同しいなやとも云り又弗をよめり韻會に不可也と見え

○鯔は小なるを云撥尾と云り坂辺のいなかより生出るものなれば名と
するにや至て小なるをすばしりといふ塩嚢抄に鱺をよみ俗に鮧字を造り
よめりたての義を見るより名くと云り土佐にてえさなどと云り

いなび

日本紀に辞字謝字遊仙窟に推辞なとをよめりなぶるとも為ぶ
里及びいなびいなむともいへり或ハ間言ともよめり

いなり

神代紀に保食神の腹中に生れる稲といへて稲生の義なり稲荷と
書に据ハきといふなるといひし故へしにて里と云ふ櫟井と古事記あり
莉羽井とえてあるゆゑ一説にこの山の地主の神を荷田の神といふなり
倉稲魂を祭るとも云ひけれは文徳実録に稲荷神三柱と見えたり本殿ハ
倉稲魂第二殿ハ須佐之男命第三殿ハ大市比売也と従ふ○古記に稲荷
の二階祭と云ハ若東寺の傍に二階長者なりしを故の神輿を拵へしこと
なりて神供を献ぜし例により今も東寺にて神供をなすといへり○或云
乃いなりとつくるハ雲南にて稲の話をなしたるなり文神代紀天熊人の故
事によれり○鍛工の稲荷を祭るハ洛若三條古鍛冶宗近此山の埴土をもて鋳鎔をなすに頻に瑞来るをもて神拝もはじまりしの事くといへり文小
鍛冶といふ謡に此神狐と現じ来て相槌を打つとも云へり○稲荷僧
正ハ壹演僧正之鞍馬傳云稲谷も同じ○伊勢奄藝郡に稲生村あり

式に伊奈冨神社と見えて朝野群載に四至を詳に記せり保食神を祭るといへり○正一位稲生大明神の古額を掛む背に文永十一年正三位藤原
朝臣経朝とみゆ○姓に呼ハ太平記に稲生平次あり

いなば

因幡の国ハ古事記に稲羽に作れり和名抄郷名にも稲羽と見ゆ○
稲葉の義によれる奇なし○稲葉の事ハ日本紀に出雲若新墾之十握
稲之穂とみえたり後拾遺集に雲をかけとよめる国の名によせてよめり稲葉
の風ハ稲葉の風に並ぶるとなり○稲葉山ハ美濃乃岐阜なり古人一首
によみたるハ因幡の国の高社近き所に今宮山と呼ぶるといへり○俗にいふハ稲
場の義也なり

いなき

日本紀に稲城と見えたり以稲造城ともみえたり古へ之制なるべし○
稲置ハ古へ公田の御倉所なるや又邑長の号にして後に姓ともなりのちもまた
為り允恭紀に闘鶏国造の姓を貶して稲置に下されし事見えたり○三
才図会に米麦笼をもよめり稲木の義なるべし稲ともいひけなす因て名づけり
なりこくなり○伊勢参宮道の稲木ハ多気郡なり大櫛神社ましての大稲

輿命を祀るごし又ござ稲本ハ稲輿に同し櫛ハ輿と音通すといへり
稲本川をもいへ川ともいひそれあるより後の世あるハ延喜式斎宮式に五月
土月晦日随近川頭爲禊と見えたる是なり

いなせ　いなせの音便なりといへりいなとせとの二つなりいなハ辞せハ諾なり
又万葉集にいなもせもと見ゆ後撰集にいなやいなやともよりける女をいなとも
せともいひはなてとやけに
いなせともいひはなたれずうきものは身を心ともせぬ世なりけり

○日本紀に屈請をよめり是非をもいふなるへし又使若稲背脛といふ名あり義
も此義なるにや

いなぶき　神代紀に髻鬘をみいなぶきとよめり御頂といふ万葉集にも
いなぶきにきれのかみとみえたり新撰字鏡に髻をいなきとよめりたな通す

いなのめ　萬葉集に明ゆくを詠る稲目と書り志のゝめといふごとく暁の
ことをいへり日本紀に稲目連あり一説に寝目の意いなは寝る目の覚る
と今も目の開といへり

いなゝく　倭名鈔に嘶をよめり玉篇に馬鳴也と見ゆいの鳴なり万葉にもあり
馬聲をいともよめり新撰字鏡に嘽をいなくとよめり

いなびかり　電をいふ稲光の義なり山中の巖石にも紀録をとへり熱閃とも
いふ○いなづまともいふ稲妻の義なり又いなつるびともいふ日本紀倭名鈔に
見えたり稲交の義なり雷雨を得て稲の胎むよりいへる詞なり万寶全書に
もこれを見えたり

いなおほせどり　倭名鈔に稲負鳥とかけり菅家萬葉集にみえて古今集に猶
ふ課字かくへしといふ説あり稲を刈たるを負ふといふ万葉集に川
ありともいへる八万葉集にもある事なし新撰二字にもなるといへり堀河院御
百首に公實の歌にあれ又馬とも此鳥ともいへり神代口訣にハ鶺鴒
なりといへり和泉式部家集あり
　逢事を稲おほせ鳥の教へずは人を恋路にまどはましやハ
倭名鈔に別に鶏をもよめり
秋の田のいなおほせ鳥も此の稲刈時の稲を負ふを立てる

是ハさらに音なるへしといへり所詮稲かる時になきて鳴事なるよし
何ともいふなるへし兼盛集あり
年くれて稲刈つる山田の稲おほせ鳥もしろめなるらん
△いよ　性をよめり日本紀にも見ゆ
いかし人　古をいふ詞也いかしべといふがごとし説詞に去来を
よめり○いかし人の事ハ古昔の訓なるへし小町か歌に
いかし人の世の事をいとくしくかくれは袖に露けかりけり
△いぬ　犬といふ義は家の守なるへし狩をする事のあり万葉集にあり
狩にひく人ハ守しあれ共の事を狩につれぬといふ事か
風俗通に狗別賓主善守禦也と見えたり○埤雅に犬喜雪と見ゆ続に雪
をたれ小母といふ是也○日本紀万葉集に去をいぬとよめり訓と同し源氏
よいぬる十日あといふ今いふ去ぬるなり俗語にハ来りし人の帰るをいぬるといふも
此ゆく事をいぬるともいふなり○新撰字鏡に睡をよめり眠也と注せり
新撰字鏡に榔をよめり○舟はいぬなといふもありき是ハゆぬさの
いぬき

転訛なるへし○源氏に童の名にいぬきといふ大君の家にやあてたるにもの
なといふ也
いぬがみ　犬神の家の家にあり狐人を害も犬蠱と捜神記に見ゆ雲州に
狐蠱あり狐を殺し人をして病熱発狂せしむ又四国に蛇蠱といふ者あり
是をへびもちといふ石見にもまた是を土瓶といふ蓄ふる器をもて名とする
也しかして犬神まうびやうさなとへいへり邪術にかかる者ハ其家の人も婚を
絶交を締はせ又備の前後列に猫神猿神なとありて狐神のたくひ也　西土
にも蛇蠱牛鬼猫鬼なとも見えたり後列俘虜郡の名上列南牧の太なさ
使も同記に見へし元亨釈書恵勝伝にいふ猿神ハ其の事にも○南の事なる記
寺をお神人に課せて破却せしといふ法花房大宮の墳墓を大神人は破
却せんとするなとも見えたり此君臣も大神の孫謂に返し今いふ清る
めその事なりとも云り
いぬがり　禁秘抄ホの公事の古に大将といふ有りて兵人伴を召て下し給
す所流滝口弓箭を帯して参くまて犬を射るを陳列为さまなくの式あり

犬追物ハ犬を追ふ射法也といへり
いぬおふもの　弓道にいへり東鑑に犬追物とみえたり後近衛院の御宇よ
て始まるといへり古へ半弓を用ゐ前後左右の騎射ありともいへり武家にて
小笠原の家にその法式を司とりしが故なりて諸流家に執り行ふ
貞應元年に源三郎に命せられし事東鑑に見えたり入道将軍頼経の時也
いぬおたまひ　倭名抄に犬吐をよめり犬吐也と注せり日本紀に反吐(ヘド)をたまひ
と訓せり
△いね　稲をいふ假根の義なるへし萬もちむハ稲なるへし後漢書に日本宜稲
とみえ物理論に稲者溉種之總稱といひ爾雅翼に稲米粒如霜性尤宜水
一名稌而有黏有不黏今人以黏為秫不黏為秔とみえ秔ハうるちなるへし
○史に穎稲といへり又延暦十二年云々國内有乗稲四万六千一束其下に國史
次に乗官物とあるハ業稲も剰稲にて官の剰物をいへり○倭名抄に糯をみしね
あれいねとよめり実ハ糯の義なり○たいたうと稱するハ大唐米と
いへりかの穀篇に魏武帝得紅稲於占城國といふもの也○本稲いなもと鞦

稲いなほと見えて正税公廨と名附て志摩國にハ田租なと穎稲と正物也
或ハ救急料稲なとを訓せり又本穎雜穎と記せる事も見えたり又雜稲を訓にあり
見えたり○日本紀万葉集に寐をよめり只稲もいねといひ稲のよみにより又寝たる
り寝るをいねといふハ稲の義といへり○神代紀に適字訓字をよめり
法に同じ万葉に稲に寄てよめり稲ハ野山の主なり
△いのち　命をいふ氣内(イキナ)なるへし大集経に息出入名為壽命一息不還即
為命終とみえたり○後漢書李郃傳に情為恩使命縁義軽とみえ運ハ天に
任す命ハ義によりて軽しの世語あるになそらへり○万葉にいのちなりけりとよみさせ
るも露といのちふてなといふも命脈のたえぬをかかるといへり今の俗語に
いふをいへるなり
いのみ　祈禱をいふ忌宣の義なり新撰字鏡に詛又註をもよみたり
忌も敬むの謂なり
△いそ　磐又磐石をよめり磯も同し大石也石齒の義といへり古事記万葉に
集り石をもよめり○今伊勢の俗いふ石の物ハ石となへのある物といへり伊

堅くなる意をいへり○小綱にいはといふも重石(オモシ)なり大綱をいふは直に綱石
といへるも石の義成べし今鉄を用ゐるも名を同うすといふをいとあやしき
になりやすい事もあり○今分名を存すといふ説は漢書に李広出猟見草
中石以為虎也射之中没鏃視之石也といへるかごとし
いしがね　神代紀に石倭名鈔に巌をよめり万葉集に石穂とよめるかは
秀出の意新撰字鏡に礓をたいしとよめり○いしかたるとも云るは肋の結え
○継とめ子か万葉あるいはかと字によめるは天人の羽衣にて盤石をなでつくすを
盤石一劫といへるは梵書にみえたり
いしきさ　石上万葉集に見えたり石の意にて北いはゆる文集の人遊木
石都有情の意なり○万葉集に石基もよめり○近江尾張などに岩床
といふ物あり石炭也木化石の類なるべし物名に名を残し旅人も見る
なども云り○新古今集にいしばしをよめるは此山とよめるは駿河に岩本島は伝奥にあり
いしみ　石見と書り此国には角山岩竹山なとは浪も高く皆嶮石の山なるを
又名とすと云り又西海九州の紀に石見の海の有るをいはゆるにもこれ

いしつむ　後の歳そのつもりてつゝみとしたるは遠くよりたゝや庭の浦の
いさりげにやそとをよむなるも同じといへり○石見の川は那賀郡江津の川いふ
石見潟も同じ紀に一郷の名とす延喜式に見ゆ
いしく　日字とよめりまた及ぶ○俗語にいはれありとふとくいふもおなじ
○言云謂道称皆同し
いしれ　日本紀に磐余をよめり古事記に伊波禮と見ゆ大和十市郡の地
名なりといふは其着さりしをいふ余字を用ゐるされといはれとよむは謬なり
イハレ
石村と書るも同し石寸と書るは事林広記に村ニ曰寸の意に通ふへし元亨
釈書釈仁耀姓は石寸氏とあるを書きそへて寸は村の略○謂をよむは字注の説なり
事有可称曰有謂失事宜不可名言謂亡謂と見えたるはこれらの意なるべし○
今俗因由をいはれといへり
いしひ　日本紀万葉集によめりいはひ鍾(ハツ)の意○いはひ酒は用語にもあり
いしぶ　祝字をよめり日本紀に祭字万葉集に鎮斎をもよめりいはふとよみて
同じ意なり忌字をもよめり神を斎ひまつりて君をやすむ代といふもよし

けなきを用ゐるをもおそ祝たる事をいふなり○神代紀に齋主神(イハヒヌシ)の神を伊
勢物語に千代もといのる人の子のためとよめる齋字訓なり
いばゆ　倭名抄に嘶をよめりいばえともいへり馬聲をいふと
ありて万葉集に見えたり
いはんや　況字訓字なるよめり言ん乎の意言に及ばざるをいふなりそまし
てと譯を詳校篇海に況を益也と注すなるべし
いはむら　神代紀に磐群をよめり群かなれば古事記に石村とかけり
いはなみ　万葉集に石浪と書て石橋の一名とせり浪は並の義川に石を
並べて渡りとするをいふ
いはひべ　万葉集に斎瓫のことをいへり吾屋戸に御諸(ミモロ)を立て枕邊に斎戸(イハヒヘ)
を居とみえ又忌戸(イハヒヘ)を斎(イハヒ)おもふとも崇神紀に忌瓮(イムヘ)と同じ神酒の瓮
なり今も神祭りし遺跡又陵墓などより此器を掘得る事多し口廣く底ま
るくてすわらず蓋しさし地に鑿居(カリスヱ)るものなり
いはらし　石橋と万葉集にみゆ久米のいはらし陸奥の磐梯山などいへり

一つの磐石を河内國平石村乃山上に石橋あり其天造の奇巌なり万葉
集によめる小川に石を並へて渡るといふも石浪(イハハシ)ともいへり拾芥集に
いはばし此磐橋ちかきも絶てしのぶかつらき神
見えたり小説に役君小角石橋を葛城山に架し山神を役使せし神形のみにく
きを恥て夜のみ作けり小角成功の遅きを憤りて一言主神を縛せりといへり
されど續日本紀には小角能鬼神を役使すとはいへど一言主神の事は見えて
すべて石橋の事は秦始皇の故事にて三齊略記に出たり一言主神は役使せ
られし鬼にはあらず後説の人を惑はすもかゝる類ひ多し
いはつぼ　岩壺の義日本紀に石穴をよめり岩をほりうがちて壺とする
なり新に作れり
岩はなよくふかばりの岩井に浪くぐなくてもせどなさぐや
○大乙餘糧をもいふ又壺石ともいふ大和の膽駒山金峯山山城の稲荷山和
東杣山近江武列字列等にありとそ又鈴石とも袋石ともいふ
いはしみづ　石清水とかけり八幡山によめり又石根の清水ともよめりいはゆる坂

山城岩清水乃称之図に清水といふも是なり○岩清水八幡ハ神名帳に載さ
ず三行教宇佐より勧請し三代実録にも石清水八幡宮護国寺と見え
大安寺縁起文にも行教和尚以其衲衣鎮于此以為石清水寺伽藍神隷于
和州大安寺八幡と併せて見るべし下に微くわしく源義家の源家の
ためなり崇重せられまして当時の如く八幡さまとなりぬ数ハ武内宿祢の
後なり○賜附の崇ハ安和年中より始る古説なり
世中の人ハ何とも思ひみだりなる神をこそ清めて
いそぐしき　万葉集ニ石走と書てさゞれも磐ともつゞり石流石激
なども同しよみなるへし渋海と流る海の光の津り跡しいへりや
いそくやす　日本紀にいそくやすかしこしと見えたり今磐瀆の義とかなるべき
ものなりや寸反ゆゑ万葉集ニ纏念此みえし此詩此なとも見えたるもあり
いそがくれ　石隠とかきり万葉集ニ磐隠座とも見えて石墓にこもるをもいひ
鎮火祭祝詞大和姫世記なとにも見えて神去此家となり日神石窟に入
ませし時天の常闇なりし故事によりて須なるへし或ハ陸墓ハ岩ぞ

遊まてかくいへるなりともいへり
いはぬいろ　梔子色といふ口無の義をもて不言色とよみてみづから女なるべ
きなれば此義をもめでたりしなり○いはぬハいはまさるといふ縁語ハ風雅集に
いふなりもいはで思ふハまさるとてこぬをもさうけにかくりやせし
いはとかし　万葉集より岩踏川によめり日本景行紀に石を蹶させられ
あるは柏のかく古墓にゆかりしよりなる石を踏石といふよしみえたるに据なり
石門柏くも岩浮ゆかり物語に石とかしはと訓せり新勅撰集
はもまされ例ハよりとよし此川をもて柏を洗ふとも浪
○節用集草本部に石遊を訓せり屋遊より転せる倭名にや
いはくすふね　神代紀に天磐櫲樟船とも鳥磐櫲樟船とも見えたりさまに
く石の化なるをもて古へより磐くすふねといへるにや
△いひ　謂をよめり字註の説に又称其言亦曰謂此之謂其斯之謂是之と
見えたりいふの転訓詁の辞也○飯といふも古へよりいへるハ強飯也殆飯ハ湯漬い
ひなり○橗を日本紀和名抄にいひとよめり器にもれるをいふ古くより樋字を

よみ文聞とよめりみとさねハいハ入の義なりや又義經記にや○天平十四年
より京師往々雨飯とみゆ

いびき　新撰字鏡に鼾をよめり息引の義也源氏物語にいびきとかいふ聞え
らぬ音とみえたり或ハ鼽鼾をよめれど鼽ハ齁の誤也し鼾字ハ所見なし

いびつ　陸圓をいふ飯櫃の形より出たる詞なるべし飯びつハ郷談正音に飯桶
とみえて飯砵の字も同書にみえたり又乙字をよめり易京房傳に乙屈也とみゆ

いひぼ　古事記に飯粒をよめりいひぼハつぶの義也日本紀三代實録延喜式
なとに粒の一字をもよめり列子に割粒為餌とみえたり○倭名抄に
眈目を訓せり新撰字鏡に疣をもよめり飯粒に似たるゆゑなり今俗にい
ぼといふ疣瘡を訓とすへし○めいぼハ目の疣也関東にてハものもらひといふ
ともいぼよりといふ○播磨の郡名に揖保あり今よみ同し新續古今集にいぼ
のミやとよめるも同し

いひし　出雲飯石郡飯石神社あり此石を以て神体とし代々に石ふとくなれり
今ハ玉垣を結廻らし社をもおほくしたりとぞ

いひけ　延喜式に飯笥とみえたり万葉集に家にあれハ笥に盛飯をとよめるこれなり

いひぐひ　伊勢物語にみゆ飯匙の字郷談正音にみえたり今いふ杓子是也
○泉州堺に飯匕の池あり形似たり

いひとみ　大和十市郡の名なり姓にもあり本ハ飫富の文字にて於保
とよむべきを倭名抄に飫を飯と誤りあやまりし訓として唱来れり神
名式に多に作る是なり○上総の飯富荘より出原時の名邑なり

いひかしく　日本紀に炊飯をよみ新撰字鏡に燀をよみ靈異記に爨をよめり

△いふ　言曰云謂道また万葉集に偁字をよめり偁ハ稱に同しといふ
へかの一訓にてあらゆる詞の氣經のもとなるへし○いとゆと同音なるをもて
いふとくといひかけたる所あり京家多く此をゆふともいふなし○語助に云と
いへる於文中為語辭意絶撤脱處とみえたりあらしを譯を入たり又あり
とも云ともよみて文する所あり句間にありて索隱に語詞といふとあり
○言をいふところといふハ後ともをすることて道も云同し日本紀に多く道
字を用う古文孝経も同し云曰ハ古語を引に用ゐる謂ハ語を指減して用う

朱子語類に謂之名之也之謂直為也といへり○揖ハ音のよあり節會に曲
折ハいやと云事なり進退曲折の時の揖なり
いぶる
神代紀に安忍字をよめり心ぼそくなるけなるといふ廣韻に忍安
不仁曰忍と見ゆ俗にすゝろ氣なる人をいふも是より出たる詞成べし
いぶき
神代紀に氣噴をよみ雄略紀に呼吸をよめり皆息吹の義なり万
葉集に神風に伊吹惑はし神代紀に吹撥之氣化為神云々是風神也と
見ゆ○近江坂田郡の膽吹山も山神毒氣を吹しよりの名也日本武尊の故
事日本紀に見えし○十訓抄に下野国伊吹の山と有り延喜式に丹波郡伊
富伎神社ありさしも草よめるいぶきは下野なりと歌によりていふ下野の
山のさしも草とも下野やしめつが原のさしも草ともよめり
いぶかし
万葉集に鬱悒をよめり今人不審をよめり故達也とかいぶかしといひ
薪の煙をかりてもえぬといへるといへりいぶハ氣吹の義かしハ希也辞也
いぶせし
万葉集に鬱悒をよめりかくもありいぶせくともよめり拾遺
ま(?)ハいぶせきさまにて流れ世(?)にいふハ字のごとくきこゆ

いぶきど
中臣祓に氣吹戸と見えたり洋中氣を吹出すをいふといへり又
なるは氣吹戸主といへる物を吉てハ必息吹する其の故に然言なり橋本門
にて入水吹生磐土命と神代紀に見ゆ
△いへ
家をいふ和名抄に第宅もよめり周伯温云家居之圖曰家故从宀
从豕後人借為室家之家と尓雅に戸牖之間謂之扆其内謂之家と見ゆ
五戸の義なるべし孝徳紀に五家相保といへる是なり光仁紀童謡に出る
君ある五家らぞあるとよめるいゑといふは張ある○成ハ字彙の古文居
まどひ室ハ家地と容られ外也と釈名に室實也人物實満其中也と見ゆ
いへで
日本紀に出家をよみ家を訓せり修行人をいふ也度字をよめり得度なり○
延喜式に凡神戸百姓不得輙令得度と見えたり○万葉集に世の中をうしと
おもひて家出せるとよめる今の語のごとしといへり
いへども
雖字をよめり歌に人はいへどもかくといふ雖字言二字の意を
いへとじ
神代紀の竹によどくあるも同じ
霊異記に家室をよみ遊仙窟に主人母をよめり源氏物語にも見えて

る家刀自の称なり家ある女をいふ伊勢物語にハいへとうじともみえたりとうじ
とうじとよべるハ家童子と書紀に書るハ論語の邦君之妻自称曰
小童の注にいへり夫人ハ非也
いへバえに　六帖によみゆえハ家の裏をいふといへり續古今集
思ひつゝ我涙けれまづさもいはれず思ひそめけるかな
易にも言不盡意とみえたり言則不得此義といふべし万葉集にも
不知をいふにとよめる例なり續日本紀にも言事ありける字彙にハ悱ハ欲
言而未能之貌とみえたり古今伊勢物語にハいへハ五十戸ともありいへハ家義
いきハ胸中といふに對せり又いへハ反え也同義なるべし

△いほ　倭名抄に庵廬をよめり編様ようせる謂なるべし草舎之といへり或ハ
いほろ此義あるべしともいふ新撰字鏡にハ墟もよめり家上に廬ある字
日本紀にみえたるハ我邦の古へをいふ續親べし○新續古今集にいほとみな
ところよめるハ播磨攝津郡之○所にも山陰のいほ杉の下庵松の下庵などもみえたり
ハ家の世にもいへとれらの庵とみちのいほむぐらの家の雪の下庵などよめり

○五百川ハ陸奥なり
いほり　日本紀倭名抄に營をよめり軍營之或ハ廬をよめり田
のいほり柴のいほり岩のいほり松のいほりなどいふ所にもみえたり万葉集廬入ともあり
又和名にいほりてとよみ曾丹集にいほりしてかりそめにも見えたり又ハ軍中旅行農
耕のかりそめのすまひをいふべし後に幕の名とも入の字義ともいへり
稿を折る体なり訓には家居(ヤドリ)あるべしへを反すべし○中臣祓詞に高山乃伊穂利
短(ヒク)山のいほりとみえたり海賦に惟神是宅亦祇是廬といへり地祇にハいほりと
いふなるべし又五百箇を略きたる謂なりともいへり
いほりまひ　新撰楽記に擶揶舞之頭節とみえたり尾張にも著宍之頭を
弾せし時擶揶烏帽子にしむて振刻舞げしたりしと思はしき記に見えたり
いま　今といふ是時也と注せり日本紀にも今とおもえたりされハ法名此所より
り馬と今とを互に誤りたる所あり或ハ如今而今乃今今者在今今也なども
ときめりいまハ今日此日目を見たりといへり○中庸に今夫天
なく今夫地なく此所などにいまそれといふ謂之といへり或郷の諺も

亦約り又説文にハ今ハ急也と見ゆ是も口語に多し俗にやがてといふ字に同し

いまだ　未字をよめり神代口訣に一不今の義といへり未ハ已に對する辭なれはいまだ
まだしきの略してまだともいへりまだしみもえずなと也まだきも是なりて又いまだ
とよみて再ひをとよむハ和語の例にして未字の意を用ゐるもいまだ
とよみたり古事記の訓にいまだとかきてとあるなり○万葉集にみゆる訓
まりいまだきかも古今集に見えたり聞けともいまだ云々源氏物語
り宮様ハまだきなかりきといふ義あるにはありしとそいへり○今將の略し
ともいへり或説に是らハ文章をそへたる猶字の如しといへり○語末にいふを
論語に未也涅盡に末耳と見ゆ易の程傳に未者非遽之辭とみえたり

います　在字をよめり坐もまた同し今より出る辭なり略してますともいへり
延喜式にいまさふとも見ゆさふ反すさ○万葉集にはあるいまさの義も
なりまた然座ともあり

いまし　日本紀に爾汝乃などをよめり坐すの義なるへし座下といふかしこき
んだの古語なり新撰字鏡に你もよめり○乃の字をいまなちとよむへき也とい
ましとよむハ此ちへたるなりといへるも古語にやあらん日紀にいまし羽根といふ
雨ふきぬ又いましかをめ群集て坐て有たりとあるなり或ハ今先の義さるき
反しやといへり

いましむ　戒をよめり今忌の義なり○勅をよむハ誡勅の義也警字をも
同し○緒といましむといふハ禁戒の意なり

いまはり　齋をいふなり反ひなり○いまひハまひるみなり

いまふつと　古今集に見ゆ字鏡にハ今ハといふ義となり万葉集に今時者四
とかきていましハとよめりしハ休め字也伊勢物語のいまハとよめり

いますかり　物語にみえたりいましげある義げおなじ意伊勢物語にハ在
計利とありいまぞかりけるともいへり今ぞと附めくことあるへしともいへり○源
氏にいますからふやうにも見ゆ細流にいましあそばせと也の義といへるか

いまくねり　源氏物語に今まゐりたる事かくるねあめりとある延喜式
り今良をよめり又今来ともあり○今参とかいふ語読なり輟耕録
に凡納婢僕初來時曰擂盤珠言不撥自動稍久曰算盤珠言撥之則動既

久曰佛項珠言終日凝然雖撥亦不動といへり俗語に佛項珠等といふ是
なり○俗説にいみ明といふは五濱之か語に仕官常以其不遇處之則無
事といふ意なるへし○今良ハ全殿寮の下部なりといへり又女今良あり

△いみ　忌をいふいみのかゝる事といふ是なり江次第に御忌勘文ハ御八卦也
といふ○いみあるなしといふハ忌嘆の音也

いみや　古事記に忌矢とみえ其廟人先忌矢可弾とありて神代紀の反矢
可畏の矢をいふへし○愚昧記に齋屋とみゆ今よみやといふ是也といへり○
上総の俗に人死すれは行先を造り門にかけて忌中を知らす是を忌屋講といふ

いみな　諱をよめり忌名の義なりけるにや名を忌るに諱といふなるに續日
本紀に先帝御名及朕之諱とみえたり前紀に御名と称するハ異邦の史
に見えたる諱とも生存中に諱といふハ紀後にて西土にも之をも犯す事の多し
よて張世南か游宦紀聞に委く辨せり○二條家に世々将軍家の諱の
字を書用るさせらるゝハ康苑院の時の二條滿基公より始まり

いみぢす　忌行をさすなりよて忌すさしと見えたり六百番句

今はかく成家
あふさかの神の恵にかゝりてより卯杖のいみはさしてありける
鴨注進記に令陰陽大夫於祠官家々門々立忌竹禁僧尼重輕服穢人と
みえたり

△いむ　齋忌をよめり敬しむの古語也といへり神代紀に畏字をよめ
ま氣より出たる訓にやいみむめをまてきこらけり○いまはしもいふまた反
むなり○神代紀に悪字をよめるは忌さらふなりなり

いむべ　日本紀に忌瓮と書り祭神の具也○今の世にいんべやきといふハ忌
瓮焼の義なり彼ぶの忌部より出る物を賞せり○忌部ハ氏姓天太玉命の
後也三代實録に改忌部為齋部とみゆ

いんど　印度ハ天竺の正名也こゝにハ月氏といふとみえたり月氏なるへし○齋戸
をよめり祝詞式に鎮魂齋戸祭あり神祇官の齋院といふあり四時祭式
に右於此官齋院中臣行事とみえたる是也式にハ十二月の祭なれとも今
儀式にもみえす十一月新嘗祭の夕にも鎮魂祭を宮内省にて行はるゝし

事なり○清和紀に盗入二神祇官西院斎戸神殿一竊二三所斎戸衣及

乗輿結御魂緒一と見えたり

いんぢ　字を印地と書り石撃の義東国通鑑に石戦とい

ふも是なり童の遊戯にふして倭韓ともにある事也或は引陣の文字

を用ふるは非也盛衰記に河原印地とも見ゆ天野氏の説に豊臣家の時まで

ては程盛なりしにや慶長の初め頃の町まで端午のいんぢ打もいとかたく禁

かたし扇風にも看板にも冑を蒙り紙のぼり押立勝負力ぬきつれて戦ふさま

なりとぞ近き頃までも田舎には川を隔てて相対して石を撃しといへり寛永

中令を下して是を禁ずと常陸岩城には川を隔てて手火松を打合互に小

屋を造りて小屋を焼を負として止といふ○正月十五日熱田社にも此式あり

いんび　忌火とよみなせり又いんことに見ゆ清め火也御竈神の名なり

六月十二月十一日に忌火の御膳を奉る是なり江次第に内膳司為至二

神態鑽火炊爨謂之忌火と見えたり文江家次第に斎火武主の命ともいへり

○火の穢を忌は我邦の法にて兼良公の説に水火是天生之物死穴二染浄

而神事忌火何也曰火雖二是浄一因レ物而穢故不レ食二炊爨之物一而已と見えたり

○多賀社を日本第二忌火といふ事なり

いんさ紀　神代紀に昔を訓し皇代紀に曽もよめり往し前の義なるべしといへり

いんのこ　小児におびゆる時にいんのこくといふは印の子なり祇園に詣づる小児に

巫女宝珠の印を児の額に捺を是なり一説に犬の子の義にて犬ぼうて邪

を防ぐ正者なりしものおまじなひなりとて小児の額に犬の字を臙脂にて書

といへり或は風俗通義に楚俗以二八月八日一以二朱墨一点二小児額一為二天灸一以厭二病疫一

といへり據とすべし

いむてふつき　忌云月の義也独物おもひて月見るは忌といへり白楽天が詩に莫下

対二月明一思中往事上損二君顔色一減二君年一と見えたり○兼良公の藤川記に霜の朝

を方つふはいむてふ月と見えたりさみだれの夜によめり

△いめ　夢の古語ゆめといふ夢の事也寐見の義なり

いめびと　万葉集に射目人と書り猟場の射手をいめ人の伏居と訓ずなる

を目伏をさして伏隠れて待ちて射る者なりといへり射目立てても

えゆ射部の義なりといへり

△いも　妹をよめるハ親語にもむかふ義なりといへり万葉集に嬬をもいもとよめり兄を夫より婦をさしひ兄姉より妹人をいへるハもとより妻を指て弟より姉を指ても然人どちも女どちも呼び女どちも互に指ていへり男子より叔母をさしても常万葉集に見えたり同集の哥ニ

妹といふをなめしかしこしかすかにかけまくほしきことにあるかも

されバ外人にハ妹といはねバならぬことといへり○芋ハ万葉集にうもとよめりといへり和名抄にいつにはえ訓を家の芋といへり今は里いもと見く芋に封ぜる語なり人の咽を戦せらるものとなくいもといふ又栗いもなり味色の如し東国の俗おりこといふ○河内国古市の一郡ハ芋をまぜた伊勢国三重郡の一村名ハ生して今も屋りて○歳首の芋物とするハ子を祝ぶる故へしいもの名義も赤波によれり○七夕に芋の葉をとりて哥をかく故は実ハいもせの義をとり用ゐるなるべし新勅撰集に

草の上の露とる芋の葉つかに祈るちハちよつ葉もなし

今芋の葉をも露和草といひ露汁の掛けちらしたるも○姉山ハ石見国に有り万葉集風土記に見えて鹿足郡都野あたりなりといへり文紀伊国に有り

いもせ　妹兄の義也夫婦をいふ夫ハ長し妻ハ弱けれバ同義にいひならへる質朴なる上古のことば也とぞ西土にも夫婦をさして兄弟と常し夫を伯とも仲子とも呼る事も見えて北齊にハ妻を呼て妹といふ事もありし神代紀に夫君をなせのきみとよみ婦をさして汝妹尊ともよまり雄略紀にハ称妻為妹蓋古之俗乎とあるを是とせり諾冊の御子なれバ詞なれハ延喜式にも伊佐奈伎伊奘冉美命妹妹ともいへり妹ハ夫の義字書ともに見えて夫ハいもせろせの條考べし○二尊ハ化生の始めなれバ論なし形化の後も太古ハ同姓をもうらハちと親族をさけど近親をハ異母妹を娶るも多く是を口實とし國風とし神代のおごり禮法さだまりたる今の世とハ異なる義の所へ苦さ禮を制せる草昧の俗になりたる事を欲して和學を辨へず標的を甘するお徒なりけるに神聖の罪人なる者や○妹背山ハ紀伊国に有り二山相対を隔てて相向へりよて万葉集にせきやまにたふむかへていもの山とよみ古今集にいもせの

家の中に放ちしは川にもあり文いろせ源をもちて在の南の池にうつされし字語拾遺に見ゆ○新撰字鏡に姑舅をいろせと訓せり

いもひ

齋食の義なり日本紀に齋食をいもひとよめり是なりひいはいひの義と鴨長明か歌にいつきのいもひとよめり精進の事也○萬葉集に齋宮をいはひのみやとよめり○いもひの略にて齋庭なり神代紀にもゆにはと訓す為家の説なり

世にいはゆるいもうとをいもひの後の意の転なりといふは

いもうと

倭名鈔に見ゆ妹人の義なり古へはいめいもいはゆ妹もあふかしふとよめり罪なり允恭紀に見ゆ伊勢物語に妹人のいとをかしげなるを見てといへるも海く妹なりとて狭衣にもいもとをうかたりて妹とかり源氏にも見えし也同腹也とも妹のいもうとまじり車に乗りみるにいひ捨ずは雅言にあり せうげしとあるかへて於あとと見ていろの物語にも中務の君妹のかりて君をともし來たり玉葉集に妹の領したるを見ておなじ頃参議雅経と申侍りしもの聞人いかせよけんいもせの山のこえてみるべく

兄といふ人はなるぬ事は風俗にて然るべし○源氏にあこくうそにしいもうとく書る八姉をさせる詞なりいもせの義よりおこる語なるべし殊に男のみ女稱妹と云古言の遺れる歟なるべし○媢をいもひは説文に楚人謂女弟曰媢とも見ゆ

いもほり

齋をよめりいまうりと通へり○いもおり場所といふ謠も齋食のをして営道藝の所作をいふなるべし中山氏の家のいもをほうちとつゞる此説にて知ねへし○家河の魚の名とも見えたり

△いや

鎮語の詞にいへり物語に見ゆ○彌をよめり氣のちゞまり出るをいやといふにや元正天皇の詔及祝詞に彌高に彌廣にといへりやゝいやの音なるを頻く書ていやがうへなどいへり○否を俗にいやともいへりやといふを否とせりいや猶くといひやらしといふも是に全漸兵制に不要を澤せり○阿波風土記に乃いやといふ事あり平家の物語に多くもて猶ほとを云ふといふ社なりの意歟なりとぞ肥後の五箇の方言も同し

いやし

鄙又卑賤をよめり彌下(シモ)の義なるべし日本紀に微をもよみ靈異記に斯下をよみけり

いやちこ　日本紀に灼然をよめり弥進の義なるへし万葉集にハいちしろしと訓せり

いやしくも　苟字をよめり聊尓粗略の意に苟賤之行と見えたるも見へ訓し
うるはしからぬ行なる中といふにて草率也と注せり義経含状に苟経
いやしくも清和の基を興しとたといふハ賤しくもの義也○苟字ハ語意に
よりてよみ変る論語に苟有用我者などハもし也苟猶若也と注せり
大学に苟日新なとハ誠也と注せり孟子に苟得其養なとハまことにとよむ
定し論語に苟合といふハいささかとよむへし

いやつぎく　日本紀に子孫を訓せり万葉集に彌継嗣と見えたり

△いゆ　愈をよめり瘉止の義やむ反ゆ也やまふハ今愈の義にやも反ゆく
いゆるともいふえる反ゆなり

△いよ　伊豫の国ハ大八洲の内に第二次に出生の洲なれハ弥の義なりと
いへりと伊豫二名洲と見えて四国の本名なり○伊豫簾ハ蔓艸なり

いよいよ　愈又彌字をよみ論語にハ愈をよめり逾ハ愈に同し万葉集にも
よくもいやしくの義なり愈ハ過也益也と注せ弥ハ甚也益也と注せと

いよやか　文選に森字注に直聳字をよみ高事紀に岐嶷をよみ土佐日記にいや
やかとも新撰字鏡に森々をいよやかとよめりいよハ弥々の義也直ハ草木の盛なるく

△いら　倭名抄に苛字をよめり玉篇に小草生刺也と見ゆ薄苛を喩ふるなく
いらくするをいふ俗に魚鯁又ハ芒刺に中りしをいらつくといふ又いがと云す
○新撰字鏡に莿を訓し刺をもいらとよめり

いらし　神事抄に喜代於布をいらうとせしてと見ゆ日本紀に貸稲
をいらしのいねとよみ貸税をいらしのちからとよみ霊異記に息利
をいらしうはびるとよめり

いらく　慈をよめり喜倍伊勢物語に鞠字もよめり淀鞠世なり
さしいへともみゆ

いらか　和名抄に甍をよめりいらかと云ふ魚鱗の屋上なる是なり

いらつこ　日本紀に郎子をよめり色つ子の義色ハいろ紀言つハ助語なるへし

いらつめ　日本紀に郎女郎姫娘子をよみ婦まて嬢まて媛もよみまた大
郎女大嬢子なともみえたりいらつひともよめり

いらなく　大和物語に敵き彼れはいらなくなりぬる宇治拾遺にいらなき
太刀をこがき又いらなくおろき大鏡におび史ふんださみに換えいらなくなる
まひて源氏物語にことくしくむもひ出なとしていらなくなるまひてと見えたり
苛なくは物語いらゝげくと同意なるべし

いらゝげく　日本紀万葉集は苛にみえたり苛嘆は痛切の意なり一説に
いらげくは物語字書に苛は煩也急也と見えたるによるといへり

△いら　槭をいふなりといひは楷梠也もまた倍字○め
しとかやいふなりあやしは縁の？と見えたり○琉球にも深奥は
沂を凡て草といふ入の意なり

いらひ　呰字を訓せり玉篇に日欲夜也と注せり○入日の岳は筑前にあり

いらかが　一書に入外と書り八雲御抄に云いらかがふたとへ露の
風のふれ露ふけて雲たけてなどいふ風情なりと云せ熱火香の意
事実にまきかりなるをいふにや

いりひ　日没をいふ日の入るとする晩陽といへるも是なり又は返照とよめり

紙因法源
宇は去れは入相のかねにやちかるらん
銭起か詩に長楽鐘聲花外盡

いりあや　源氏に舞の絵の末といふ細流に舞有取綾手故云入綾
とも見えたり或は入調をよめり

△いる　入と射と鑄と熱と平上去の別なり是か中に入と熱はいらるれる
音に用らけり射と鑄は一の一語也○俗に金をいるといふを入の字に
意西去の俗語に渚といふを渚をもちひるとよめり○神代紀に没字内
字をよめるも入に同し

いるかせ　文選中の忽諸をよめり俗にゆるかせともいへり新撰字鏡に當て
堂々と同しくいるかせとよめり

△いるこ　肉子の意西土にて甥子をもいへり又古事記に九子匪と
見えたり○肉子箕なり内子菱なり

いもひも　雌紐雄紐とて結ひを紐合せて結ふ意にあるへしといへり○古今

集なる色絲の同し心をむすびてんとよめるハ同心結の謂之趙后外傳に
五色同心結一襲とみえたり

いれずみ　黥をよめり入墨の義なり文入ずみともいへり明律にいふ部民
刺字なり劄青ともみゆまた刑名なるを侠客なとの私にするは水
滸傳などにみえたり

いをこざけ　本朝式に内子鮭とみえたり今いふ子籠鮭のことなるべし

いちかくびら　類聚雑要鏡筥の條に見え台記に入帷とみゆあさすけり
ひらづみのうへざしなど紀にもあり伊勢奉幣使記に御筥一枚入帷一條白
張とみえ雅亮抄に香壺の筥すりの筥にもあり

△いろ　色をいふいろめくいろどるなどいふ是なり日本紀に其をもよめり○
砂石集にかつらのなかしともいふしもいろ今いふ志るの縁なり
ことを志るしてもよめり○穀氣を色といふは日本紀におもへりと訓
より靈驗寺に
きれにうまくとあるに出たり其事なれ

○俗に女の事をいろといふも毛詩の序疏に女有美色男子悦之故經文通謂
女曰色とみえたり○喪服をいふも色の義なるべし埃囊抄に親の喪に居人
の染衣を着るをいろをきるといふと見ゆ古書にもみえて今も人の
いふなり續古今集に
ぬきすつるかひそなけれ藤衣今は色ある袖のなりけり
○倚廬ハ諒闇の御所をいへり板敷を下て葦の簾布の帽額にて麁
服を用ゐらる

いろは　母の古語也神代紀和名鈔に見ゆ色身ハ母より父より六色母の義
なるべし実母をいふ詞也○色をいろはといふは万葉集に見えたり又母を
いろともよみたればいろも同義なるべし中に繊あるを色といへるなり
ほめく草木も葉をみて何と分たぬを色葉となるべしといへり
もみぢのふ金白銀のかさねにも出しと思へいしへのあけぼく
○童蒙のよむ初めにするいろはもいろはの義なりといへり壬生集
あさき夢みしゑひもせすいろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむ

○山槐記に今日訪三藏院法印次伊呂波をみえ千字文の次韻とみえ
たり梵字をつゞれることといへり○西行談抄にいろはうたの解
これ以ハあまく此楮を紹あして麻にそへかけ給ふなるを

いろと　日本紀に弟又女弟をよめりいろはおと也略同母弟をいふなり○
妹をもよめり古事記には伊呂妹とかけり○一説にいろハ家等とかきて
り家等をいはろといへるなり

いろね　日本紀に兄まて姉を訓せり弟いろと同韻通す同母兄姉をいふ色なる
允恭記に姉をいろはと訓しいろねの謬なり○色音といふ音声の色なる
をいふなり又色あるをもいふ二項に省へし

いろせ　古事記に須佐之男命詔云吾者天照大神之伊呂勢者也とみえて
たり同母兄をいふ也といふそせとは実にあらは仁賢紀に古者不言兄弟
長幼女以男称兄男以女称妹とみえてこれをもとりて古事記に伊呂兄と
も見ゆ京今集的序註にいふやうて天照大御神のみこと也とかゝれたるを
乃かなふへし

いろふし　婚姻日記にいろふしにぞとみえたり色節の義なるや忠武紀日
記にも見ゆ清紫草にまた是等あれとかざりいろふしといへり○外宮に色
節内人あり朝野郡載に見ゆ

いろく　色をもて綵物にいふなり又色あるをもいふなり雑色などもいふ

いろねのこ　日本紀に兄子をよめり姪をいふ○いろと子は弟子をよめり

△いらけ　日本紀に驚駭をよみ又喘息をもよめり驚く時は必息荒あへぐ
ものなれは同義なるへし○駭惋をいらけなくとよむ

いらけなき　幼稚をいふにかくいへりいらけなしと同し物に驚きやすき時なれ
ばいふにや是にかへりいらけでとも綺是ハ是もなき八助の詞なるへし又いハ
縒綰引先此義なりともいふ

△いゐ

△いゑ

△いを